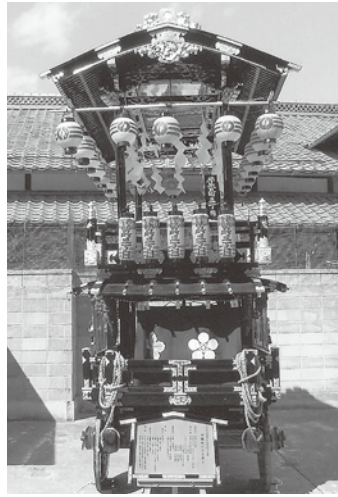




令和元年 5 月 1 日現在	
世帯数	: 807 世帯
人口	: 1484 人
男	: 712 人
女	: 772 人

松本市重要有形民俗文化財
松本城下町の舞台 シリーズ⑧
『伊勢町三丁目 舞台の由来と特徴』



た用材を修理・修復して使用するというものでした。解体現場や木曾の漆工房も見学に行き、解体した際、2階の金天井裏板には大改修に携わった人々や職人の名が記されています。

伊勢町3丁目の舞台は、明治25年唐破風の半屋根で、用材は生地のまま建造されました。

大正11年、大工棟梁の立石利喜太郎により大改修が行われ、2階に切妻屋根、霧除け、鍔金具、彫刻が施され簡素で清雅な印象の現在の姿となりました。

平成22年1月には、舞台保存会解体修復事業として工事に着手し、同年11月、無事修復工となりました。

この時の基本的な工事方針は、文化財であるため解体し

て、大変驚きました。当町会の舞台は、『あまり特徴がないのが特徴』で、人形はなく彫刻も多くありませんが、姿かたちは実にすっきりとした典型的な松本深志舞台です。他の舞台の中に紛れるとあまり目立たず、そのところが舞台の個性を見えにくくしているように思います。しかし、よく見ると味わい深い舞台なのです。

木目は清雅な趣で美しく、また随所に施された鍔金具は、派手さはありませんが丁寧な仕上げで好感が持てま

す。特に高欄下の波千鳥の八双金具は大変好ましく、金具修復を担当した職人によると、下地にベンガラを朱漆を施し磨き上げ、その上に箔押しして仕上げているそうです。光を受けると下地の朱色ににじむように漏れ、金色に独特の深みと色気が加わって大変美しいとのこと。

数少ない木彫刻は彫刻師の清水湧見によるもので、波千鳥、竹雀など鳥類をモチーフとした作品が各持ち送りに取り付けられています。

また、当町会の舞台は保存会の中で唯一、銅板で屋根が葺かれています。

この舞台が町の宝として、また誇りとして維持管理していくことは大変だと思いが、末永く引継がれていくことを願っています。



Presented by
視聴覚委員会

まちかどフォト～春の花だより～

春の訪れとともに、地区内は桜や藤の花が咲き、行き交う人々の目を楽しませていました。



4月19日撮影
(旧開智学校跡地の桜)



4月20日撮影
(女鳥羽川沿いの桜)



5月7日撮影
(中町通りの藤)

第二地区の文化・伝統 シリーズ⑥ 秋葉神社の春季例祭



秋葉神社は全国各地にある火防・火伏せの神様で、「オタク」の聖地として名高い東京「秋葉原」の名も、最寄りにあるこの神社から来ています。もともと、この東京神田に秋葉神社が建立されたのは明治初期ですが、松本放光寺境内の秋葉神社は、18世紀の半ばに本町1丁目、2丁目の商人たちによって遠州浜松の秋葉大権現から勧請されました。それ以来毎年4月18日に春のお祭りが行われていま

す。江戸をはじめ各地の城下町は繰り返し大火に見舞われ、住民にとって防火は生命・財産にかかわる重要な課題でした。その結果、防火性能に優れた蔵造りの街並みが各地に生まれるとともに、それぞれの町に秋葉神社が建立され

ることになりました。当時は庶民の娯楽的な要素も兼ね、お伊勢参りに代表される神社仏閣への参詣が盛んでしたが、そのための主要なルートが「善光寺街道」や「秋葉街道」として今に名を残しています。諏訪から天竜川に沿って浜松に続く「秋葉街道」は信州からの秋葉詣での人々がたどった街道です。松本の先人たちも防火の祈りとともにこの道を歩み、秋葉山本宮秋葉神社からご

分霊を戴いたことでしょう。ちなみに私たちにとって「塩の道」は糸魚川から続く北塩ルートですが、南信州でのそれは、南塩ルートである秋葉街道でした。放光寺は住所こそ蟻ヶ崎ですが、感覚的には城山公園のちよつと

令和元年度 第一地区町会役員 (敬称略)

【町会長】

【町内公民館長】

本町 1 丁目	山崎 眞生 夫	内藤 英昭
本町 2 丁目	長崎 俊夫	都筑 朋彦
本町 3 丁目	石塚 栄一	林 健司
本町 4 丁目	北原 一男	岩原 正勲
本町 5 丁目	宮澤 左千夫	高橋 明利
伊勢町 1 丁目	鈴木 史朗	田中 博
伊勢町 2 丁目	田多井 健至	犬飼 陽一
伊勢町 3 丁目	深澤 健能	桐原 崇光
分銅町	藤澤 淳次	(同左)
新伊勢町	真島 富男	寺沢 厚子
神明町	田中 修	塩原 信一
国府町	村田 精義	毛利 達生
西五町	春日 孝介	(同左)
西長沢町	新井 富士子	(同左)
中条中	中畑 康則	花村 麗子
博労町	伊藤 峯一	伊藤 善立
中町 1 丁目	羽山 義輝	飯森 福太郎
中町 2 丁目	今井 啓一	鷺沢 寿美子
中町 3 丁目	伊東 祐次郎	(同左)



電車通り

30年前の1月。

当時小学生だった私にとって、一時代の終わりや始まりは、さして重大なことではありませんでした。『昭和』よりも画数が少なく、新しい響きを持つ『平成』という元号。子どもの中には、ただただキラキラと眩しい、未来そのものに感じられたものです。

2歳の息子と迎えた2回目の改元。私は、小さな息子の手に筆を握らせ、一緒に『令和』の文字を書いてみました。思えば私の『平成』は自分の

ことで精一杯でした。身内にはさんざん心配もかけたし、何より自分個人が一番大切だったので。かなり遅めの結婚や出産を経た今、ようやく両親や新しい家族、次世代への責任に目が向くようになりました。そこへ訪れた時代の節目。

息子と書いた初めての文字を眺めながら、彼の未来に思いを馳せます。この子たちの世代が、それぞれの花を咲かせ、その花が和を成し、未来を支える力となりますように。そして誓うのです。その未来のためには、母も力をつくすのだと。